日刊工業新聞
年月日 19 11 22
ページ 31
NO.

デザインのチカラ ⑰

仕事に合わせ環境選択

カフェテリアで同僚と気軽な打合せ、個室で集中して資料を作成、外出先から会社に戻らずシェアオフィスで仕事、子どもを横目に見ながら自宅でテレワーキング。この様な働き方が少しずつ日本でも広がりつつある。

1990年代にオランダから始まったと言われる「アクティビティ・ベースト・ワーキング（ABW）」と呼ばれる働き方だ。場所や時間に制約を受けず、自分で自由に働く環境を選択する働き方を言う。この働き方は個人の生産性を向上させ企業の業績向上にもつながると、世界的にも広がりを見せている。ABWを実施するには、オフィスにおいてもさまざまなシチュエーションに合わせた環境をデザインする必要がある。ひとりで集中できるスペース、即興で打ち合わせを行うスタンディングコーナー、リフレッシュしながら仕事ができるカフェテリアなど、ワーカーが仕事の内容に合わせて選択できる最適な環境を用意する。

ABWのデザインを取り入れた三井不動産の法人向け多拠点型シェアオフィス「ワークスタイリング汐留」

慶応義塾大学の島津明人教授と東京大学の稲水伸行准教授と共同で行った「オフィス環境におけるABWの効果研究」では、日本のオフィスで最も多く取り入れられている島型対向式レイアウトや、単に席だけを自由にしたフリーアドレスよりも、このABWの方が「個人のパフォーマンスの向上」や「身体的・精神的ストレスの軽減」「ワーク・エンゲイジメント（仕事に対する熱意・活力・没頭の状態）の向上」につながることが明らかとなった。

ただABWを導入し効果を得るためには、企業や職種などおのおのの仕事に最適な環境をデザインすることが必要である。また、ABWが個人の生産性を向上させる一方、希薄となりがちな集団としてのコミュニケーションを活性化させる取り組みが企業には重要。多様な働き方を受け入れる文化の醸成や制度設計に加え、ABWを導入する目的の浸透、社員同士のつながりを生むイベントの仕掛けなどの対策を同時に行う必要がある。そして何よりもマネジメント層を中心とした働く社員自身の意識改革が重要となる。与えられた環境で仕事するのが当たり前の時代から、自分でワークスタイルをデザインする時代への変化がすぐそこに来ている。

（大川貴史・三井デザインテック・企画・マーケティング室長）

無断転載・複写禁止©㈱日刊工業新聞社